

マイ スコープ

阿賀野川・大島のサギ

新潟市 高橋正良



阿賀野川にかかる泰平橋上流に大島と呼ばれる中州がある。サギが使用していないものを含め三千数百の巣があり、アオサギ、ゴイサギ、ダイサギ、チュウサギ(希少種)、コサギ、アマサギなど千組以上の営巣が確認されている。数年前、大島で砂利採取を行ったため、サギが営巣地を松浜の人家近くの松林に移転し、悪臭や鳴き声のため周囲の住民から苦情が出た。大島のサギの巣を守る声が上がると、河川管理者が理解を示し、砂利採取を中止したので、サギは翌年から中州に戻った。

去年、日本海沿岸東北自動車道が大島を横断すると発表された。県北はロックード事件の確執もあり、何かと冷や飯を食わされている地域である。日沿道は県北の住民が熱望する道路で、経済的理由だけでなく、被災時のライフライン、リダンダンシーとしても重要である。私自身も県北に短時間でいけるメリットは大きい。しかし、このまま放置し、サ

ギが大島で営巣を続ける場合、高速道を走行する車とサギが衝突して事故が起きたり、反対にサギが大島を放棄した場合、人家周辺に営巣し、再び被害が出る可能性がある。

日沿道の通過位置を変更することは、今の時点ではインターの取り付けの関係などで難しいとのことであった。都市計画決定を覆し、工事をやり直す努力よりも、ミティゲーション(開発行為を行う際、自然破壊を最小限にし、緩和措置をするなど、環境に配慮すること)を行うのが合理的である。私案ではあるが、ドイツのアウトバーン建設の際、バイエルン州建設局が採用したアラッハの森の調整・補償措置を良い手本とし、樹木を含め中州全体を移転したり、河川敷の別な場所にサギの営巣適地を作るなど検討してはと思う。野鳥の会は、サギと日沿道の問題の解決に悩む行政と一緒に知恵を絞り、汗を流してはいかかと思う。



右岸の胡桃山付近に飛来し巣材を採るサギ

日本野鳥の会新潟県支部

設立20周年を迎えるに当たって

支部長 大島 基

3年後の1998年(平成10年)には、新潟県支部が設立されて満20年を迎えます。1978年4月23日、加藤忠一、風間辰夫、小松吉蔵、清野展、千葉晃、常山秀夫、根津和育、本間隆平、宮越一俊、山本明、山谷正喜、渡辺央、渡辺弘雄の諸兄を発起人とし、初代支部長に加藤忠一氏、副支部長に山本明氏と千葉晃氏、以下幹事10名、会員数67名で再スタートしました。

発足早々、宝珠山の鳥獣保護区認定、繁殖地地図調査等ハードな案件をクリアされました。第1回の総会を昭和54年4月21日～22日巻町角田浜の妙光寺ユースホテルで開催し、本部より市田事務局長をお迎えし、祝辞と講話をいただきました。加藤支部長の挨拶に「会の成功は、人と人の和と協調の精神が重要である」と協調されたことを思い出します。

第2回の総会は、昭和55年4月19日～20日村上市の瀬波温泉にて開催され、役員改選の席上、加藤支部長より突然「暫定役員でなく新規に若返りを図るべく新たな支部長を…」との断固とした辞任の弁とともに、2代目支部長に私が推挙されることになりました。まさに青天の霹靂とはこういうことだ、と頭がポーンとなったことを思い出します。それから早いもので15年、だいぶ頭も白くなり、前支部長の辞任の弁のごとく、若返りを図るべきではないかと思う今日この頃であります。

さて、本題に入りますが、平成5年度内に全会員よりアンケートを取らせていただき、総会にて大筋で御承認いただきました20周年記念事業について、平成6年11月6日の臨時役員会で下記のような方向付けがなされました。

1. 20周年記念事業は記念誌の発行をもって当る。
2. 記念誌は会員が日常利用でき、記念としても記録の集大成としても価値のあるものとする。
3. 内容は新潟県産鳥類目録と新潟県内探鳥地案内とする。(150ページ程度、サイズA5又はB6)
4. 実行委員会を設置する。
5. 予算は約70万円とする(会員1名当たり1500円×450人)

以上のように実行する予定です。

何かと物入りではありますが、20周年の大きな節目です。会員の皆様の御理解を得て費用の負担や貴重なデータの提供をお願いし、御協力を願う次第であります。何かと気忙しく、まだまだ寒い日もありそうです。くれぐれも御自愛されることを祈念し、お願いにかえさせていただきます。

新潟市寺尾中央公園で繁殖した

チゴモズ (*Lanius tigrinus*) の観察報告

新潟市 三 富 一 裕

近年著しく減少し、新潟海岸から姿を消したかと思われていたチゴモズが、新潟市寺尾中央公園に生息しており、繁殖に成功したという情報(千葉、私信)を得て、筆者は1993年と1994年の2ヶ年5月から8月末まで連日観察を続けた。この度編集部より原稿用紙2枚の依頼を受けたので、その結果の概要を報告する。



新潟市寺尾中央公園に渡来したチゴモズ♂A (1993年)

本種の渡来初認は'93, '94年ともに5月25日であった。渡来した直後から雄はテリトリー形成と共に雌を追尾し、番いを形成する。求愛給餌や交尾は、同所性近縁種(モズ、アカモズ)のものと同様で、営巣場所に近い木の枝上と藪の中で行われた。繁殖生活は、渡来、番い形成、造巣、産卵、抱卵、育雛、家族生活および渡去の順で進行する。

造巣に4日程度、産卵は1日1卵と推定される。抱卵は孵化直後を除いて雌だけがいき、第1卵産卵の時から夜間抱卵を始めクラッチ(1腹卵数)が揃った段階で本格的な抱卵に入るものと考えられる。孵化までに12日を要し、孵化から巣立ちまでにはさらに約20日を要した。巣立ち後の育雛は雌雄分担して行い、かなり徹底している。

巣立ち雛の体格と羽色には、性差と思われる。

る相違が認められる。

採餌した小型動物中最も多かったものが甲虫目に属す幼虫で、特に育雛時には全体の約40%を占めていた。次に多かったものは鱗翅目の幼虫であった。雛の独力採餌は巣立ち8日後に始まり、15日までにほぼ完成する。

巣立ち後の家族生活は約1ヶ月間続き、この間に親鳥は換羽を行う。換羽には約20日以上を要し、換羽終了後の雌雄はよく似た地味な褐色に変化するが、その色調や声の相違によって識別は可能である。

1994年6月、形態学的特徴から本種とアカモズとの交雑個体と思われる個体を捕獲した。本種はアカモズとの間に交雑を起し得るものと考えられる。



クロマツの横枝端部に営まれたチゴモズの巣と雌雄親鳥

引用文献:

三富一裕. 1994: 新潟市寺尾公園でチゴモズが繁殖.新潟県生物教育研究会誌, (29), 29-36

朝日池・鶴の池周辺樹林の鳥類

山本 明・後澤正知・古川 弘・末崎 朗・中川 直剛

はじめに

高田平野の一角に残された朝日池と鶴ノ池および周辺の樹林には、秋から冬にかけて種々のワシタカ類が飛来越冬し、春の移動時期には多くの小鳥類も訪れ、野鳥観察者の目を楽しませてきた。しかし、総合的な調査報告はないように思われる。

朝日池・鶴ノ池周辺における県営大潟都市公園計画と関連して、当支部では基礎資料を得るために、1992年から両池周辺の鳥類について野外調査を行ってきた。水鳥類については本誌前号でその概要を報告したので、今回は樹林を主とした周辺の陸鳥類（水鳥類の一部も含む）について報告する。

1. 調査地と調査方法

調査地の樹林は海岸から1.0~2.5km離れた海岸砂丘（標高20m）の一角にあり、あまり広くない。1993年以後、霊園や護岸堤（図1のウ・エ）が築造され、樹林の一部は伐採されている。全体の約半分はスギ人工林（成林）であるが、コナラを主とした二次林もあり、またスギ林と広葉樹との混合林も認められ、湖畔付近はハンノキが多く成育している。

調査に当たっては、朝日池・鶴ノ池それぞれの湖畔樹林を通るようにセンサスコースを設け（図1）、コース選定には林内の歩道の有無や林相の状況などを考慮した。朝日池周辺ではこのコースの他に定点調査地を設け、移動期（4~6月）の調査に活用した。

各コースでは毎月数回ロードサイドセンサス法（幅100m）で踏査を実施した。種々の制約により調査日の間隔は一定にできなかったが、春の移動期には踏査回数を多くした。結局年間を通して、Aコースで31回、Bコー

スで28回の踏査を行った。調査時刻は春の繁殖期は早朝に行い、他は遅くとも午前中には終わるようにした。なお、継続的なセンサス調査は1992年4月から'93年3月まで行ったが、その後若干の補充調査も行った。さらに、1993年から春の移動最盛期には、Aコースの奥で標識調査も行い、その結果も解析に利用した。

Aコースは約800mで、その植生は約20%がコナラを主とする二次林（図1のア付近・図2）、約30%がスギの成林、さらに約30%がスギと広葉樹の混合林である。この他に片側だけアカマツと広葉樹の混合林、ススキ・低木林地、畑地、住宅地、などがコースに沿って認められる。Bコースは約1000mで、公園の歩道に沿っている。一部にスギ林がある他は公園化されており、アカマツが少し混じる広葉樹の疎林となり、低木類は刈り払われている（図3）。コースの起点付近は駐車場となり、隣接して芝生地がある。ここはかつては丸山も含め鬱蒼とした樹林であった。またこのコースの北側対岸の樹林（図1のイ）は保存状態の良好な自然林となっているが、歩道がないためコースは設けられなかった。

2. 結果と考察

調査コースの環境は樹林だけではないので、樹林に飛来しない鳥も出現した。結果をまとめるに当たってはこれらの鳥も加えて整理した。

(1) 鳥相の概要

表1に示したように、この調査では10目27科94種の出現が認められた。このうち、スズメ目が66種(70%)と圧倒的に多く、次いでワシタカ目の12種(13%)であった。スズメ目の

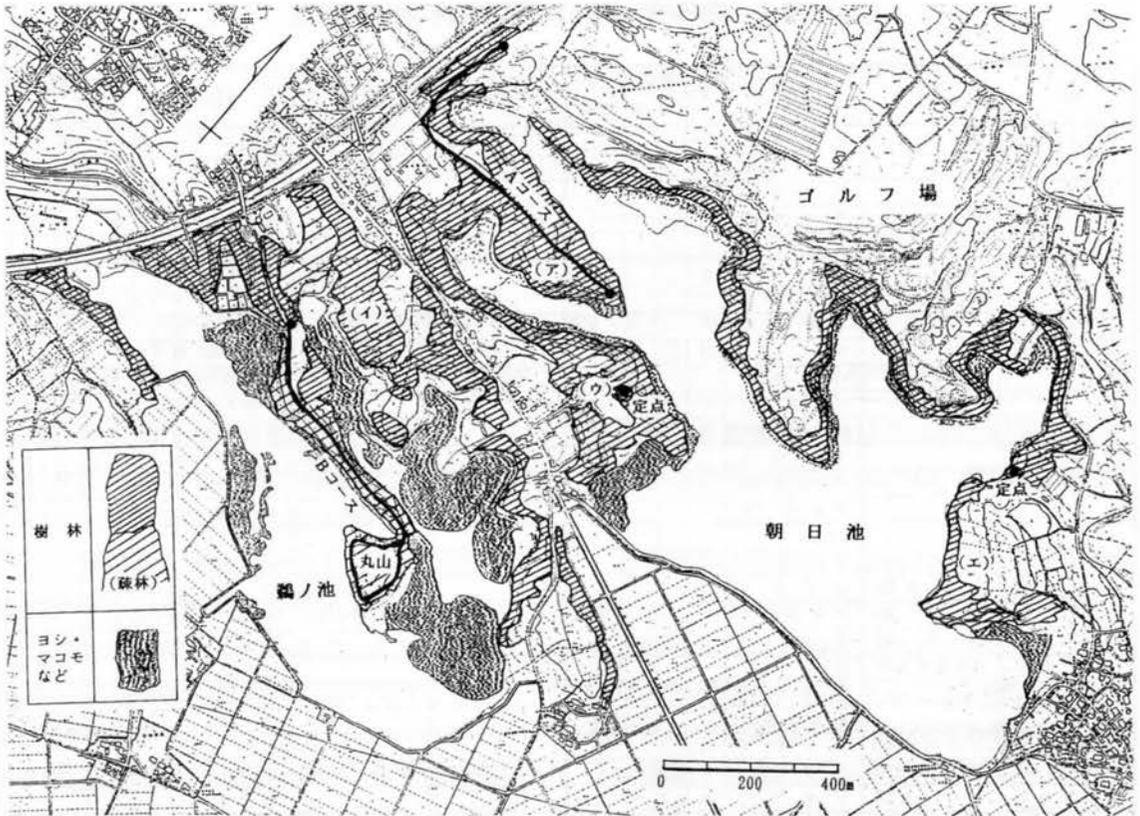


図1 朝日池・鶴ノ池周辺の樹林分布および調査コース



←図2 朝日池Aコースの自然林（二次林）



↑図3 鶴ノ池Bコースの疎林

うち最も多いのはヒタキ科の22種(23%)であったが、同科に属する大部分が樹鳥類であることを考慮すればうなずける結果と思われる。

記録された鳥類のうち、移動期に出現する鳥（以下本文では通過鳥とする）は39種（全出現種の41%）であった。夏鳥は少なく、通過鳥のうち一部留まるものを含めても10種(11

%)、留・標鳥は26種(28%)、冬鳥は23種(24%)であった。留・標鳥と夏鳥（通過鳥のうち一部夏鳥となるものも含める）を合わせた35種のうち、当該樹林地で繁殖しているもの、またはその可能性のあるものは合計27種(29%)であった。

(2)種数と個体数の季節変動

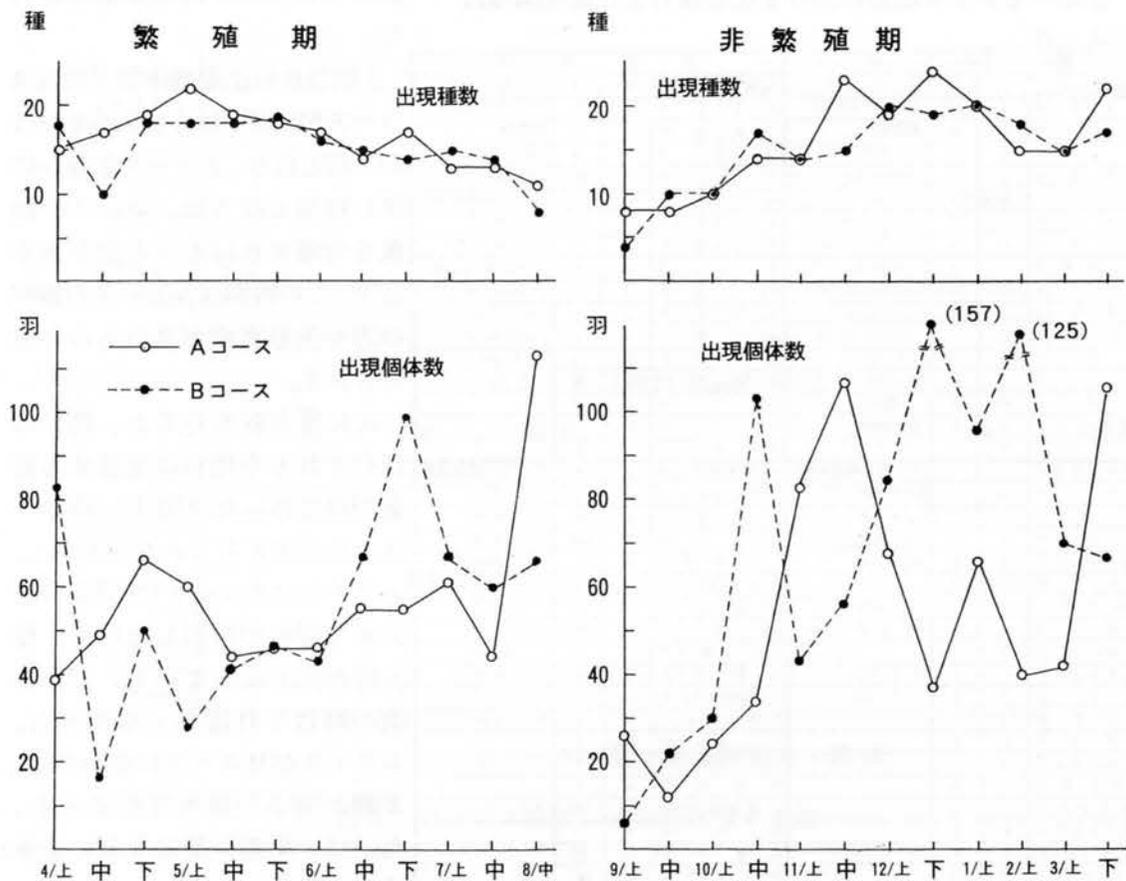


図4 センサス調査で出現した種数および個体数の季節変動

センサス調査の結果から、出現した種数と個体数を季節的にみると(図4)、両コース共変動が大きいこと、特に個体数の変動が大きいことが分かった。

繁殖期についてみると、種数ではAコースが4月から5月上旬まで増加しておりこの時期に通過鳥の渡来滞在があったらしい。Bコースにその傾向がないのは、通過鳥はBコースのような疎林にはあまり飛来しないことを示している。両コース共5月中旬から6月上旬にかけて、種数・個体数共に安定しているのは、この時期に大部分の小鳥類が繁殖に入っているためと思われる。それ以後の増加は、家族群やムクドリなどの集合群の飛来に因るものである。

非繁殖期では種数・個体数共に繁殖期より変動の幅が大きい。種数が両コースで11月

中旬から1月にかけて多くなっているのは、冬鳥や標鳥の飛来に因るものである。しかし、非繁殖期の個体数は大きく変動し、9月から10月上旬までの少ない時期を除き、両コースで大きく違う結果となった。これは、非繁殖期には群れをつくって移動する鳥が多いので、狭い空間での鳥相と個体数は時々刻々変化していくことを示している。即ち群れが飛来していれば多く、飛来していない場合は少なく記録される。

(3)繁殖期の鳥相

繁殖期はそれぞれの種数によって異なるが、ここでは4月から8月までとした。

表2に示すように、この期間にはセンサス以外の観察種も含めて74種が出現している。このうち通過鳥は30種で、全体の41%を占めることが分かった。4~5月には冬鳥も残

表2 センサス調査における出現種および出現個体数

出現種	繁殖期			付記	出現種	非繁殖期		
	コース	A	B			コース	A	B
アオサギ	1	10	センサス以外の	ダイサギ	-	7	センサス以外の	
トビ	23	31	観察種	アオサギ	-	9	観察種	
キジ	7	7	・コイサギ (U)	ミサギ	3	2	・オジロフシ (A・U)	
コチドリ	1	1	・ササギ (U)	トビ	7	22	・オオタカ (○)	
キジバト	4	5	・ツミ (A)	ハイタカ	-	1	・ハイイロチュウヒ (○)	
カワセミ	-	○	・オオジシギ (U)	ノスリ	-	5	・ハヤブサ (○)	
ツツドリ	○	1	・コシアカツバメ (A)	チュウヒ	-	1	・チゴハヤブサ (○)	
ホトトギス	-	1	・アカモズ (U)	キジ	3	4	・コチョウゲンボウ (A)	
カワセミ	2	5	・ヒレンジャク (A)	キジバト	4	15	・キセキレイ (A)	
アオゲラ	2	4	・コマドリ (A)	フクロウ	1	-	・タヒバリ (A)	
アカゲラ	○	-	・ルリビタキ (A・U)	カワセミ	-	1	・コガラ (A・U)	
コゲラ	4	○	・ノゴマ (U)	アオゲラ	14	14	・ノジコ (U)	
ヒバリ	5	1	(A: 朝日池 U: 雑ノ池	アカゲラ	4	6		
ツバメ	20	9	の各周辺樹林)	コゲラ	6	3		
ハクセキレイ	3	3		ヒバリ	1	-		
ビンズイ	3	1		ツバメ	-	2		
サンショウクイ	-	1	センサス踏査回数	ハクセキレイ	2	4	センサス踏査回数	
ヒヨドリ	46	12	4月 A: 6回 B: 4回	セグロセキレイ	3	4	9月 各2回	
モズ	6	6		ヒヨドリ	47	43	10月 各2回	
コルリ	3	-	5月 各4回	モズ	5	26	11月 各2回	
ジョウビタキ	2	2	6月 A: 4回 B: 3回	ミソサザイ	10	-	12月 各2回	
ノビタキ	-	2		ジョウビタキ	-	2	1月 A: 2回	
クロツグミ	2	-	7月 各2回	シロハラ	13	2	B: 1回	
アカハラ	1	-	8月 各1回	ツグミ	13	66	2月 A: 2回	
シロハラ	1	-		ツグミ属 SP 1	-	-	B: 3回	
マミチャジナイ	-	1	計 A: 17回 B: 14回	ウグイス	11	5	3月 各2回	
ツグミ	3	6		キタイタダキ	15	-		
ヤブサメ	1	-		コサメビタキ	-	2	計 各14回	
ウグイス	21	1		エナガ	43	5		
エゾセンニュウ	1	-		ヒガラ	82	4		
コヨシキリ	-	5		ヤマガラ	28	3		
オオヨシキリ	-	10		シジュウカラ	105	150		
メボソムシクイ	8	9		メジロ	8	-		
エゾムシクイ	6	2		ホオジロ	15	32		
センダイムシクイ	16	○		カシラダカ	38	151		
キタイタダキ	-	1		ミヤマホオジロ	4	4		
キビタキ	2	○		アオジ	26	1		
ムギマキ	2	-		オオジュリン	2	10		
オオルリ	1	-		アトリ	17	137		
エゾビタキ	-	2		カワラヒワ	20	19		
コサメビタキ	7	11		マヒワ	92	5		
サンコウチョウ	-	1		ベニマシコ	3	1		
エナガ	○	4		ウソ	5	2		
ヒガラ	-	10		シメ	-	4		
ヤマガラ	6	-		スズメ	68	58		
シジュウカラ	81	70		ムクドリ	55	135		
メジロ	61	2		カケス	12	15		
ホオジロ	52	27		オナガ	-	2		
カシラダカ	7	21		ハシボソガラス	5	8		
アオジ	19	7		ハシブトガラス	28	26		
オオジュリン	-	2		計	819	1031		
アトリ	1	1		一回当り平均	58.5	73.6		
カワラヒワ	43	42		出現種数	39	44		
マヒワ	2	-						
ベニマシコ	1	1						
ウソ	1	-						
イカル	-	1						
スズメ	162	101						
コムクドリ	8	11						
ムクドリ	132	192						
カケス	-	2						
オナガ	-	○						
ハシボソガラス	31	29						
ハシブトガラス	82	41						
計	893	715						
一回当り平均	52.5	51.1						
出現種数	49	51						

[註記]

1. 出現個体数は、各回出現数の合計である。
2. ○はセンサスロードサイド外で観察されたもの。
- は出現しなかったものを示す。

留しており、約10種が観察された。

1回当りの出現個体数平均はAコース52.5羽、Bコースのそれは51.1羽となり、Aコースが僅かに多い結果となった。コースの距離を考慮すればもっと差がある筈で、この時期はAコースの樹林の方が生息密度が高いものと推定される。

次に優占度を見ると、高いのはいずれも平地林に生息する普通の鳥であった(図5)。両コースともスズメとムクドリが多く、ムクドリはAコースで8月に少し大きな群れが出現したため、優占度が高くなっている。しかし他の時はそれ程多くなかった。ムクドリがBコースに多いのは、本種が明るい林を好むことと、丸山での巣箱の架設などによる結果と思われる。

Aコースの樹林ではメジロは春の一時期ヤブツバキなどの花の蜜を吸いに多数飛来したが、Bコースでは低木が刈り払われているためかあまり出現しなかった。コルリ、ヤブサメ、ウグイスなどがBコースに現れないのもそのためであろう。両コースにおける出現種と優占度の相違の多くは、林相や樹木の密度および林床を含めた植生環境の違いによるところが大きいと考えられる。

(4)非繁殖期の鳥相

この時期には、センサス以外の観察種を含めて60種となるが、このうち冬鳥として飛来しているのは25種で、全体の42%

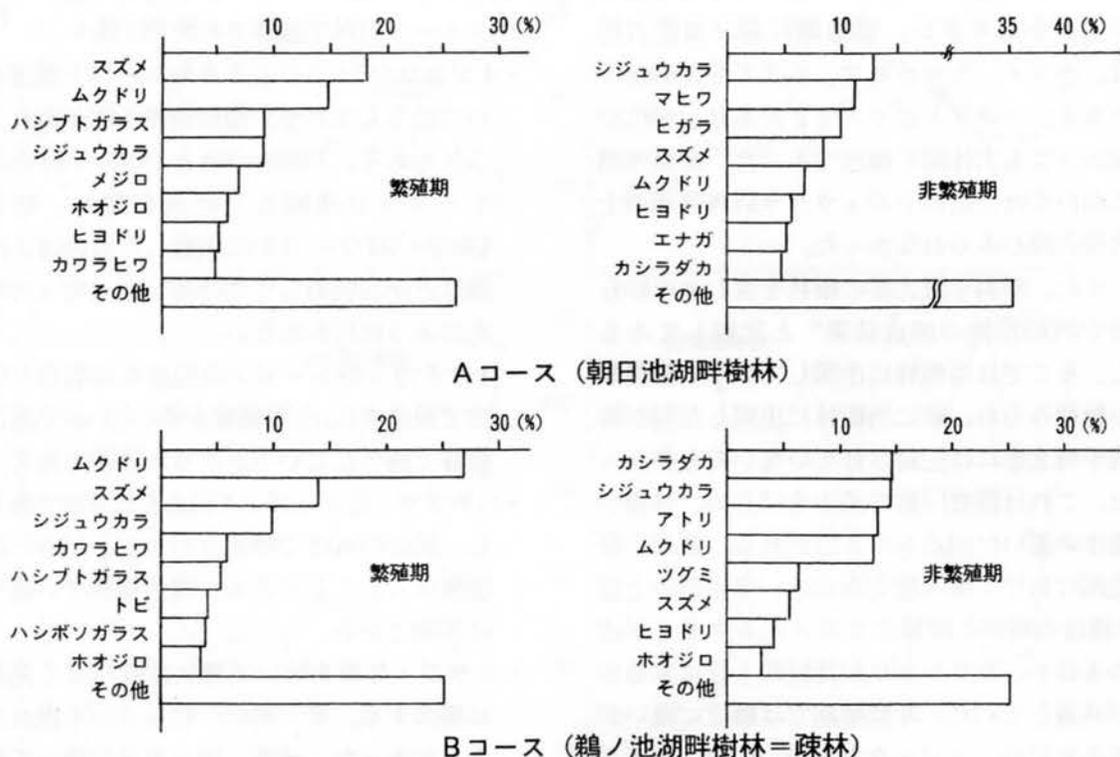


図5 センサス調査による優占度の比較

を占めていた。これらの中には雪が多くなると他所へ移動するものが多い。ウグイス、アオジ、オオジュリン、ベニマシコなどは少雪のシーズンには少数が残留して越冬することが分かった。1992～'93の冬は一時的に積雪はあったものの、概ね暖冬少雪だったので、冬鳥の種数と個体数は平年の降雪シーズンより多かったのかも知れない。

繁殖期の結果と比べてみると、出現数は両コースとも繁殖期より少ないが、出現個体数は1回当たり平均でAコースは58.5羽、Bコースは73.6羽となり、いずれも繁殖期より多かった。また両コースを比べてみると、Bコースの方が出現した種数・個体数ともに多いことが分かった。コース距離を考慮してもなおBコースで出現個体数が多いのは、トビ、キジバト、モズ、ツグミ、シジュウカラ、カシラダカ、アトリ、ムクドリなどがAコースより多く出現しており、地上採餌性が強く林縁

や疎林を好む鳥が多いためと思われる。Aコースの樹林では、エナガ・ヒガラ・ヤマガラ・シジュウカラなどのカラ類が全体の30%以上を占めており、越冬期の優占種となっていた(図5)。しかし、Bコースの樹林では林内が疎らで明るいためかシジュウカラ以外のカラ類はあまり出現しなかった。また、Aコースにマヒワが多く飛来したのは、その種子を餌とするスギ林が多いためと思われる。

(5)他の平地林との比較

新潟平野の海岸砂丘にある佐潟の周辺にもアカマツ林が分布しており、ワシタカ類をはじめ、多くの樹鳥類が出現するが、スズメ目の多くは通過鳥であるという。¹⁾ 樹鳥類について比べてみると、当樹林より出現種が少ないのは林相の違いに因るものと考えられる。

1989～'90年にかけて、上越市のクロマツ海岸林と大潟町のアカマツ林(広葉樹も混生)について行われた通年の調査結果²⁾ によ

ると、出現種は樹鳥類だけをとっても当樹林の方がかなり多い。繁殖期における優占種は、スズメ、カワラヒワ、ムクドリ、シジュウカラ、ハシブトガラスなどであり、順位が変わっても大体同じ傾向であった。非繁殖期においては上位のシジュウカラ以外共通の上位優占種がみられなかった。

また、新潟平野北部の樹林を含む海岸砂丘地や内砂丘地の調査結果³⁾と比較してみると、そこでは当樹林に出現していない樹鳥類が数種みられ、逆に当樹林に出現した種が新潟平野北部には記録されていないのも多かった。これは調査回数の多少をはじめ、林相や植生の違いに因るものと思われる。新潟平野北部における優占種をみると、繁殖期の上位2種は当樹林と同様にスズメとムクドリが占めるほか、カワラヒワが比較的上位に来るのが共通していた。非繁殖期では順位に違いがあるものの、シジュウカラ、ヒヨドリ、ホオジロ、カシラダカ、スズメ、ムクドリなどが優占種として出現しており、両者で共通していた。

新潟市関屋浜海岸林（クロマツに広葉樹が混生）では毎年春（4月～6月）と秋（9月～11月）に標識調査が行われているが、1987年秋から1991年秋までの9シーズンの調査結果⁴⁾によれば、放鳥種は中型鳥類（ササゴイ・オオコノハズクなど）以下で合計67種が記録されており、その大部分は樹鳥類で、迷鳥を除いても当樹林で観察されていないものが約10種含まれている。逆に当地で観察されたもので、新潟関屋浜で放鳥されないものも数種みられた。標識調査では、目撃や声の聞き取りでキャッチできない面も補足できるので、長期にわたる調査結果を考慮すれば、当樹林より出現種が多いのも当然と思われる。

3. 貴重種および注目される鳥

(1) 貴重種

朝日池および鶴ノ池周辺の樹林に飛来する貴重種は表3に掲げるもので、いずれもワシタカ類であった。ミサゴ以外はいずれも秋か

ら冬に現れる。これらは、見通しの悪いセンサスルート以外で観察された例が多い。⁶⁾

- ・オジロワシ⁵⁾：このところ毎シーズン雌雄番いで越冬しており、他に若鳥1羽が現れることもある。1992～'93と1993～'94の両シーズンは連続して若鳥が現れ、特に1993～'94シーズンに出現したものは、行動などから判断してこの番いから育った若鳥のように思われた。
- ・オオタカ：毎シーズン成鳥または若鳥が単独で飛来する。出現頻度が多くないので周辺樹林で越冬しているかどうか不明である。
- ・ハヤブサ：毎シーズン1羽または2羽で飛来し、周辺の水田で観察されることが多いが樹林に入ることもある。周辺樹林での越冬は不明である。
- ・ミサゴ：冬季を除いて魚の採餌によく両池に飛来する。多い時は一時に4羽も現れることがあった。通常、捕った魚を持って東方の山地へ向かうが、周辺樹林に止まって食うこともある。暖冬少雪のシーズンは遅くまで留まり、早くから出現する。
- ・チュウヒ：本来アシ原で狩りをするが、樹林上も飛び回り、アシ原の湖畔林にもよく止まる。毎シーズン飛来し、単独のことが多いが、2羽か3羽も同時に出現することもある。少雪のシーズンは越冬しているものもあるようである。
- ・ハイタカ：時折現れる程度で観察例はそれほど多くない。渡りの時期にも現れる。

(2) 注目される鳥

フクロウはロードサイドセンサスでは3月に1回だけ記録されたが、その他にも目撃例や声を聞いた例があるので、この周辺樹林に生息し、繁殖している可能性もある。営巣する樹洞のある木が少なくなり、本種は数が減っている。

カワセミは朝日池にも鶴の池にも時々現れるが、採餌のためであろう。近くの川や池で繁殖しているものと思われる。樹林の中をよ

表3 朝日池・鶴ノ池の周辺樹林に飛来越冬する貴重種

オ ジ ロ ワ シ	天然記念物・「種の保存法」・R-絶滅危惧種
オ オ タ カ	「種の保存法」・R-危急種
ハ ヤ ブ サ	「種の保存法」・R-危急種
ミ サ ゴ	R-危急種
チ ュ ウ ヒ	R-危急種
ハ イ タ カ	R-希少種
「種の保存法」:「絶滅のおそれある野生動植物の種の保存に関する法律」(略称「種の保存」)に指定されている国内希少野生動植物のリストに入っているもの R:環境庁編「日本の絶滅のおそれある野生生物」(通称「レッドデータブック」)に指定されているもの	

く通り抜け、採餌のため樹木を利用する。

キビタキは朝日池の西の樹林で、1992年と1993年5~6月の繁殖期間中囀りが聞かれたので、繁殖した可能性がある。本種は保存状態の良好な自然林に生息する夏鳥である。

コムドリは県内でも生息地がやや限定される夏鳥で、本種は樹洞営巣性の鳥で、巣箱もよく利用する。

また貴重種以外にも種々のワシタカ類が出現する。ハイイロチュウヒやコチョウゲンボウなど、このところ毎シーズン飛来してそれ程珍しいものではなくなっている。ツミやチゴハヤブサも時折現れる。チゴハヤブサはかつて10年程前は秋の渡り時期によく観察されたが、最近少なくなっている。

なお、チョウゲンボウも周辺水田でよく観察されるが、樹林には入らない。

ま と め

朝日池・鶴の池の周辺樹林の鳥類について、その生息渡来の状況を把握するために1992~93年に調査した。その結果、樹林と関わって生息渡来する鳥は90種以上を数え、その4割が移動の際に出現する通過鳥であることがわかった。したがって、当樹林は渡り鳥のコース(特に春季)の一つになっていることが確かめられた。一方、当樹林に生息渡来する種数および個体数は、繁殖期の一時期を除き、季節による変動が大きいことが明らかになった。また疎林状となっている丸山公園の方では、一時期を除き、繁殖期の個体数は少

ないが、非繁殖期は林縁や疎林を好み、地上採餌性小鳥類が飛来するため、個体数は多かった。

当該地の広葉樹性二次林およびスギやアカマツと広葉樹の混合林は、野生鳥類の良好な生息環境となっており、フクロウやキビタキなどが繁殖期にも生息することが確かめられた。そして貴重種を含むワシタカ類が毎シーズン飛来・越冬していることも明らかになった。しかし、当樹林での推定を含む繁殖種は28種と多くはなかった。

湖畔の樹林は、水鳥類にも安心感を与え、⁷⁾また周辺樹林は渡りや移動をする鳥にとっても、中継地として重要な役割を果たしており、その保全が強く望まれるところである。

引用文献

- 1) 千葉 晃(1982):佐潟の鳥類.新潟県生物教育研究会誌(17)61~67
- 2) 上越鳥の会(1994):雪国・上越の鳥.189~192
- 3) 渡辺 央他(1981):新潟平野北部の鳥類調査.長岡市立科学博物館研究報告(16)41~75
- 4) 小松吉蔵他(1993):標識調査からみた新潟市海岸林における鳥類の渡りの様相.新潟県生物教育研究会誌(28)41~51
- 5) 新潟県野鳥愛護会研究部・渡辺 央(1991~94):オジロワシ・オオワシの渡来状況調査.野鳥新潟(79, 82, 85, 89)
- 6) 山本 明他(1989):上越地方のワシタカ類について.新潟県生態研究会誌(4)1~14
- 7) 山本 明他(1994):朝日池・鶴ノ池の水鳥類(概要報告).日本野鳥の会新潟県支部報No.38

新潟海岸に飛来したベニヒワ

新潟市 千葉 晃

はじめに

寒帯や亜寒帯から飛来する珍客に会うことを密かな楽しみにしている私にとって、ベニヒワは一度は観察してみたい野鳥のひとつであった。新潟市で暮らすようになって10年目の冬（1977年12月14日）にやっとその願いが叶えられ、さらに10年後の1987年にも観察の機会に恵まれた。今となってはたいへん古い話題になって申しわけないが、拙い経験を披露し、ここに当時の様子を残しておくことにする。

既往の文献に記された新潟県におけるベニヒワの記録

ベニヒワは我が国には冬鳥として渡来するが、渡りは年によって多少があり一般に本州中部以南では少ないとされている（日本鳥学会、1974）。本州中部に位置する新潟県での観察記録は少なく、千羽ら（1967）によれば、マヒワに混じって少数渡来するが、時々数百の大群で渡って来ることがあり、岩船郡での古い記録の他、柏崎、新潟、加茂などでも観察記録があるという。一方、柏崎刈羽地方の鳥類を扱った文献（風間、1963）によれば、1962年11～12月に約1,000羽が荒浜に飛来し、柏崎には1960,1962,1965,1967年に大群が渡来したと記されている（風間、1968）。しかし、その詳細は不明である。また、北蒲原郡紫雲寺地方では1978年1月3日に約400羽、同月14日に約60羽の飛来が確認されており（曾我、1979）、長岡市周辺では渡辺（1983）が長岡市における1973年1月13日1羽と1977年12月28日の20羽余および大河津分水における1978年2月26日の2羽を記録に留めている。しかし、上越鳥の会（1994）の纏めた同地方に関する最新の目録には本種が掲載されていない。

新潟市への飛来傾向

新潟市では、これまで2冬季にわたって本種を観察あるいは標識・放鳥する機会が得られた（表1、2）。初めて本種を確認したのは1977年の冬のことで、初雪の降った12月14日の朝、アキグミ（通称ハマグミ）の疎らに生えた緩傾斜地で餌を探してさかんに地上や草本（ヨモギやアレチマツヨイグサ）の間を移動する姿であった。ジュジュッ・ジュジュッという鳴き声を発しながらせわしく動きまわる様子にしばしみとれ、少し経ってから約50羽の一群であることを確認した。天候が悪かったので、至近距離から撮影できたにもかかわらず、不鮮明な生態写真しか残すことができなかった。人を恐れる様子がなかったので、急速標識用のネットを1枚設置し13羽を捕獲し、速やかに体各部を計測してから放鳥した（表3）。13羽のうち、頭部の紅色が鮮やかで胸も紅色を帯びた雄は13羽中わずか3羽にすぎなかった。双眼鏡で観察した時も雄はかなり少ないように思われたので、この結果は充分頷ける。検体数が少ないため問題は残るが、雄は雌よりやや大型な傾向（翼長、尾長および体重値）がみられた（表3）。この年は注意して野外観察をしなかったため、これ以上の記録を残すことはできなかったが、前述した文献からも読み取れるように、新潟市だけでなく平野部の各地に渡来していたものと推察される。高野（1980）によれば、このシーズンは全国的に本種の渡来数が多かったようで、関東地方でも利根川の下流域や海岸付近のアシ原で多数の群れが観察されたという。新潟市における二度目の顕著な渡来は1986年冬から翌年春の間に認められた（表1）。1987年1月には、阿賀野川河口左岸の砂州にある草地に約200羽が飛来し、

表1. 新潟市および県内各地で観察されたベニヒワの個体数 (1986年秋-1987年春)

観察年月日	時刻	天候	場所	個体数	その他
1986年10月中・下旬		不明	浜浦町海岸林上空	1-3羽	移動
12月5日	8:55	不明	浜浦町海岸林上空	70-80羽	移動
12月29日	午後	曇り	阿賀野川河口砂州草地	約150羽	移動・採食
1987年1月2日	11:30-14:30	曇り	阿賀野川河口砂州草地	約200羽	採食・移動
1月5日	9:00	曇り	浜浦町市街地・海岸林	約30羽	移動
1月11日	14:00	曇り	阿賀野川河口砂州草地	約35羽	移動
1月11日	14:10	曇り	松浜新井郷川水門	3羽	移動
1月15日	9:30	曇り	鳥屋野潟湖岸	5羽	休息
1月22日	8:50-9:10	晴れ	青山地区海岸林	約50羽	採食・移動
1月22日	10:00-10:05	晴れ	浜浦町海岸林	約15羽	採食・移動
1月27日	8:55	曇り	青山地区海岸林	約25羽	採食・移動
1月27日	9:05	曇り	浜浦町海岸林	約35羽	採食・移動
2月2日	10:05	不明	青山地区海岸林	2羽	移動
2月6日	14:55	不明	浜浦町海岸林	約100羽	移動
2月15日	9:30	雪	赤塚上佐潟松林	数羽	移動
2月19日	11:30	不明	浜浦町海岸林	7羽	移動
2月19日	15:30	不明	浜浦町海岸林	1羽	移動
2月23日	8:55	不明	青山地区海岸林	35羽	移動
2月24日	9:15	不明	浜浦町海岸林	1羽	移動
3月13日	10:30	不明	浜浦町海岸林	3羽	移動
1987年1月8日	10:05	快晴	妙高高原町池ノ平	1羽	移動
1月25日	13:05	晴れ	佐渡島両津港	1羽	採食
2月17日	9:10	曇り	長岡市大積地区	10数羽	移動
3月3日	8:30	不明	西蒲原郡潟東村	600-800羽	採食・移動

表2. 新潟市で捕獲されたベニヒワの個体数と性など

捕獲・放鳥場所	捕獲年月日	捕獲数・その性別	使用網数
新潟市浜浦町日本歯科大学構内	1977年12月14日	13羽 (雄3, 雌10)	1枚(12m)
新潟市阿賀野川河口砂州草地	1987年1月2日	27羽 (雄10, 雌17)	1枚(12m)

表3. ベニヒワの計測値 (雄3羽, 雌10羽)

性	翼長(mm)	尾長	足根骨長	嘴峰長	体重(g)
雄	74.0-78.0 (75.7)	58.0-67.0 (61.3)	15.0-15.5 (15.1)	8.5 (8.5)	13.2-14.2 (13.6)
雌	68.0-76.0 (73.1)	55.0-63.0 (59.3)	14.0-15.5 (14.8)	8.5-11.0 (9.2)	10.2-14.8 (13.0)

()内は平均値



図1 雪の朝、ヨモギの実に群れるベニヒワ3羽



図2 阿賀野川河口砂州の草地に渡来したベニヒワの群

地上やアレチマツヨイグサに止まってさかんに採食する様子が再び観察できた。この時はたまたま持参していたネットを利用して27羽を捕獲し、標識・放鳥できた。やはり雄(成鳥)は少なく、27羽中10羽にすぎなかった。残念ながら用具を持参していなかったため、計測値を残すことはできなかった。

新潟市以外での観察結果

出張等で新潟市を離れる際もベニヒワの声や姿に注意するよう心掛けた結果、1987年の冬は妙高高原の他、両津市、長岡市、潟東村などでも本種を見ることができた(表1)。おわりに

ベニヒワはイスカやレンジャクにみられるような顕著な「不規則な集団移動」すなわち「侵入、irruption」を示す鳥種ではないが、餌植物の成育状態を反映して個体数が大きく変動し、個体数の増大した年は侵入的な移動を示すものと思われる。お互いに気をつけて観察を続け、小さな記録でも残すように心掛けたいものである。

—もしかすると、1996~1998年あたりは来るかもしれませんよ!—

引用文献

- ・千羽元一、風間辰夫、本間隆平(1967):野鳥p1-120(新潟県林政課)
- ・上越鳥の会(編)(1994):雪国上越の鳥p1-233(郷土出版社)
- ・風間辰夫(1963):柏崎刈羽の鳥類p1-30(柏崎日報社)
- ・風間辰夫(1968):新潟県柏崎付近の鳥類について、山階鳥研報5(4):370-396
- ・日本鳥学会(1974):日本鳥類目録p1-120(学習研究社)
- ・曾我信男(1979):紫雲寺町の野鳥(簡易印刷)
- ・高野伸二(1980):野鳥識別ハンドブックp1-327(日本野鳥の会)
- ・渡辺 央(1983):信濃川の鳥類長岡市立科学博物館研報(18):49-73

冬のガンカモを見よう!

に参加して(朝日池探鳥会)

上越市 小堺 久美子

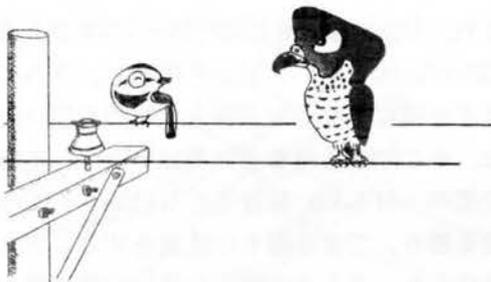
私は、12月4日(日)に初めて探鳥会に参加したのですが、この日の朝は、前日からの雨で何となく外出する気になれません。でも、観察地がヒシクイ・マガンの渡来する朝日池であったことから、観察会がなくても彼らを見てこようと思い、とりあえず現地までいってみることにしました。「9時集合」の数分前に到着すると、そこには車の列、列、列。朝からの雨やアラレのものともせず、手に双眼鏡やら望遠鏡を持って寒空の朝日池を見ている方が多いこと。とりあえず私もこの仲間入りをさせてもらい、時折アラレの混じる寒い朝日池探鳥会が始まりました。

朝日池周辺だけの観察でしたが思ったよりも多くの鳥が朝日池を訪れ、その鳥たちの中でも特に印象に残ったものをご紹介します。

まず、白い尾羽のオジロワシです。やって来てすぐにハンノキに止まり大きな翼を休めたので、これは観察のチャンスとばかりに双眼鏡を覗きました。木の幹や枯れ葉に隠れてどこにいるのか分かりません。しかし、顔をキョロキョロするオジロワシの姿が小枝のすき間に見え、「なるほどオジロワシのくちばしは枯れ葉の黄色と同じ色だったんだ」と納得すると同時に、ハンノキで隠れんぼしているオジロワシが何となくかわいく思えてくるのでした。

そして、ハヤブサが風を切るようにやってきました。私は、初めてハヤブサを見たのですが、最初の感想が「テレビのCMに出てくるハヤブサと同じだ」ですって。自分で言うて何だか興ざめする感想で情けなくなりましたが、驚いたことに数本を挟んでセキレイ

(セグロセキレイだったか、ハクセキレイだったか忘れてしまいました)が2羽いるのです。ハヤブサがセキレイを襲うこともなく、平和な状態が続き、とても不思議な光景でした。この時は、ハヤブサは飛ぶ鳥は捕まえても、止まっている鳥(この場合はセキレイ)は逃げる恐れがあるので襲わない、という説に納得して帰ったのですが、あの不思議な光景の理由は、満腹の捕食者は不必要な殺生はしないということではないかと考えます。でも、本当のところどうなのでしょう？



ハヤブサを満喫した後に、せっかく来たのだからと、望遠鏡を覗いている方に、「何か面白いものは居ましたか」と訪ねました。「どんなものが面白いと思うの？」という返事が戻ってきた瞬間、私は何を面白いと思って鳥を見ているのだろうと考え込んでしまいました。その戸惑っている様子を察してか、ともかく私が今までに見たことのない鳥をいろいろと教えてもらいました。まずトモエガモを教えてくださいますが、ともかく視野の中はカモだらけでよく分かりません。時間をかけてようやくトモエガモを見つけることができたのですが、トモエガモがなかなか分らなかったのは、図鑑の写真イメージしすぎたために、実物の色の不鮮明さに顔のトモエを見落としていたためでした。次に、ミコアイサ

の雌を教えてもらいましたが、これはとうとう探せず見逃してしまいました。そのほかにも、目の前で潜水を披露してくれたカムリカイツブリ。潜水をしても水に濡れないカムリカイツブリの羽毛を見て、あのくらい超発水で暖かい防寒着があったらなぁと思わずにいられませんでした。そしてピンクのくちばしがかわいいオオバン。オオバンを見ている時は案の定「大判、小判」という声が出て、皆考えることは一緒なんだなぁと…。もちろん朝日池ですからVの字の編隊で飛ぶヒシクイを上空に見ることができました。その姿はとても凜としていて美しく、今日の探鳥会に来てよかったと思わせてくれました。この日配布されたプリントに、ガンが編隊を組む理由は、前の鳥が羽ばたいてつくった上昇気流をうまく利用して体力の節約をするとあり、その賢さに感心してしまいました。この時やって来た群れは、何かを警戒して朝日池には降りずにそのまま飛び去って行ってガンをじっくり観察する機会がなかったことは少し残念です。

青空が気まぐれのようにのぞく時もありましたが、アラレの襲撃にも負けず(車に何度も逃げ込みはしましたが)、最後に観察された種を確認して観察会は幕を閉じました。本日確認された種は32種。悪天候にもかかわらず多くの鳥たちがそこに暮らしており、自然の厳しさにも適応して生きている鳥たちの力強い姿に尊敬を感ぜずにはられませんでした。



ガンのVの字編隊、長谷川和正氏撮影

冬の海鳥を見よう！

に参加して（寺泊探鳥会）

新潟市 大林 正人

恒例の冬季探鳥会が2月5日寺泊港を中心に行われました。当日は前日より暖かい日が続き、冬の日本海とは思えない穏やかな日となりました。午前9時30分、町立体育館に集合、大島会長の挨拶の後、周辺の鳥の説明をいただき、全員車に分乗、最初の探鳥地寺泊港と向いました。港ではあいにくカモメ達は外海へ外出中で一羽もおらず、カムリカイツブリとウミウがのんびりと港の中を泳いでいるだけでした。早々に寺泊水族館へと移動しました。トビ数羽に出迎えられ観察開始、堤防のイソヒヨドリ、沖合いを泳ぐウミアイサを観察することができました。水族館の方々のご好意により水族館の屋上へ入れていただき、絶好の観察ポイントより観察することができました。次の探鳥地、出雲崎港では沖合いの波間を泳ぐシノリガモを観察できま



シノリガモ、末崎興助氏撮影

した。町立体育館に戻り事務局本間さんのタラ汁に舌鼓を打ちながらの昼食でした。

穏やかな天気のためか、多くのカモメたちは見ることはできませんでしたが、シノリガモをはじめ31種もの鳥達を観察することができ、冬の穏やかなとても満腹な探鳥会でした。

本部から依頼がありました

日本野鳥の会阪神大震災義援金にご協力をお願いいたします。

このたびの大震災では、多くの会員やそのご家族の方々が多大な被害を受けた模様です。

また、本会兵庫県支部（会員約1700名）の事務所が入居していたビルも損壊し、立ち退かざるを得なくなるなど甚大な被害を受けました。そこで本会理事会の発案により、兵庫県支部の一日も早い再建を主な目的として義援金を募り、できる限りの応援をすることになりました。どうぞ全国の会員の皆様の暖かいご支援をお願いいたします。

◎ご送金は◎

郵便振替口座 00130 - 7 - 36732
加入者名 日本野鳥の会阪神大震災義援金
受け付け 1995年4月末日まで

お寄せいただいた義援金の用途は関係支部と協議し、募金の結果は「野鳥」紙上で報告いたします。物品の寄贈はご遠慮願います。

本会に対する寄付ではありませんので、免税の扱いにはなりません。

《問い合わせ先》（財）日本野鳥の会総務部
TEL 03 - 3463 - 8998

発行 1995年3月31日 No.39
発行人 大島 基 編集者 小林成光 千葉 晃 末崎 朗
日本野鳥の会新潟支部
事務局 〒951 新潟市東中通1番町86番地28
☎025 - 229 - 2018 本間由紀子方 <振替>新潟1 - 6002